

【用語】 上白井―北群馬郡子持村 急度―すばやく、必ず 言上―申し上げる事

【解説】 戦国時代、長尾氏の居城であった白井城は、家康の関東入国に伴い、本多康重が二万石を与えられて入封したが、康重は関ヶ原の合戦の功績により慶長六年（一六〇一）三河国岡崎城（愛知県岡崎市）へ移封された。その後、領主の転封や断絶があり、元和四年（一六一八）に本多康重の次男紀貞が一万石で再び入封することになった。この間の治政については、慶長三年三月の「牧之郷田畑水帳写」が残されており、検地が実施されたことをうかがわせる。しかし、その実態となると史料が乏しく、領主の変遷も含めてほとんど明らかにされていない。

この文書は、元和五年三月藩主の本多紀貞が上白井村の土豪の新左衛門尉に対し、上白井の山川の管理を委任したことを示すものである。無断で伐木や漁獵をする者を発見した場合は通報するよう命じていることがわかる。ただ、差出人の署名が紀貞ではなく「規貞」となっている点は検討の余地がある。なお、紀貞は元和九年四月に白井城で病没したが、世継ぎがなかったため白井藩も廃藩となった。